

# 王墓山古墳調査概報

1983年3月

善通寺市教育委員会

## 序

大麻山の麓に幾何学的に点在する古墳群、それは、善通寺の歴史であり、人々のいのちの根源です。

その一つ、6世紀ごろと推定される前方後円の王墓山古墳の発掘調査は、昭和57年の秋から冬にかけて、未知の扉を開く思いで進められました。

この地方には、稀有といわれる横穴式の構造、さらには貴重な副葬品の数々は、人々の想いを遠く古代へ誘いました。

いま、資料の整理を進めていますが、調査概要を作成し、多くの人の活用にご供するにあたり、土地の関係の方々、調査を協力して下さった方々に心から感謝申し上げます、今後共、ご支援とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和58年3月31日

善通寺市教育長 佐 柳 正

## 例 言

1. 本書は、善通寺市教育委員会が主体となり、香川県教育委員会の協力を受けて実施した、王墓山古墳の調査概要の報告である。
2. 本遺跡は、善通寺市善通寺町字大池東1785番地の1に所在する。
3. 本事業は、国庫補助を受けて実施した緊急確認調査である。
4. 発掘調査は、善通寺市教育委員会が主体となり、香川県教育委員会文化行政課副主幹松本豊胤の指導のもとに、技師森本義臣、東原輝明が担当した。
5. 本書の執筆は松本、東原、森本が分担し、編集作成は森本が行った。

## 目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 立地と環境	3
4. 墳丘について	5
5. 石室について	11
6. 遺物の出土状況	19
7. 遺物について	23
8. ま と め	31

## 1. 調査に至る経緯

昭和57年3月11日付で、四国開発商事株式会社（代表者 岩井正平氏）から善通寺市教育委員会に対して、善通寺市善通寺町字大池東1785番地の1に所在する王墓山古墳地の宅地造成計画届け出がなされた。

王墓山古墳は、前方後円墳として早くから注目されている貴重な埋蔵文化財である。すでに、大正年間には、史蹟名勝天然記念物として調査報告がなされている。

現在、墳丘は果樹園として耕作されている。丘陵総面積は4178㎡である。

香川県教育委員会、善通寺市教育委員会は四国開発商事株式会社（所有者 石谷光明氏は宅地造成工事に関する一切の権限を業者に委任済み）に対し文化財の重要性を説明し、数回の協議を重ねて保存方を熱望したが、計画変更が困難であることを確認した。そこで、改めて事前調査について協議し、調査結果を待って再度協議する旨の合意を得た。

善通寺市教育委員会は、国庫補助を受けて、県教育委員会指導のもとに昭和57年11月15日より王墓山古墳の発掘調査に着手した。調査によって、貴重な成果が確認された。

王墓山古墳は、善通寺市は勿論のこと全県的にも極めて重要な埋蔵文化財として、保存措置が強く望まれる。

## 2. 調査の経過

現場での発掘調査は、秋も深みゆく昭和57年11月15日に開始する。本墳は、かねてから盗掘の噂があり、成果があまり期待されていなかった。それでも、石と遺物の発見に躍起となった開始当初。また、小枝重なる密柑の木々を縫って苦闘した墳丘測量。すべてをあざ笑うかのように、発掘の進展に従って続々とその成果があらわれる。初めの予想はみごとにくつがえされ、横穴式石室の検出。石屋形の発見。質量ともに充実したおびただしい遺物の出土。どれをとっても注目すべきもの。一驚、また驚嘆の日々。苦しみと落胆の果てにみた、みずからの目を疑いたくなるようなうれしい事実。新しい発見の喜び。

以下、日々を追って工程と成果のいくつかを記し、調査の跡をたどりたい。

昭和57年11月15日 王墓山古墳の発掘調査開始。

11月16日 樹木の一部伐採と杭打ち作業。

11月17日 墳丘地形測量開始。

11月18日 全景写真撮影。

11月24日 後円部墳丘の発掘調査開始。上部土層は開墾のため攪乱著しい。掘れども出ず、鍬音鈍く、顔色冴えない。

12月3日 ようやく石が顔を出す。

- 12月7日 墳丘主軸と平行して直線上に並んだ石列を検出。
- 12月10日 石室の角部分を確認。
- 12月14日 墳丘斜面部トレンチの発掘に入る。墳裾及び二段築成跡確認。墳裾附近より埴輪小片多量に採取。
- 昭和58年1月6日 後円部より横穴式石室を検出。早期横穴式石室の特徴が顕著である。
- 1月7日 玄門部閉塞扉石の検出。落石、また落石……。
- 1月14日 「石屋形」の検出。
- 1月17日 屋形内より金銅製品発見。副葬遺物顔を出し始める。
- 1月25日 玄門扉石前より須恵器坏蓋3セット出土。
- 2月3日 玄室奥壁附近より馬鈴及び雲珠を検出。副葬遺物続々と現われる。玉あり、須恵器あり、刀あり、また、馬具多し。石室一面鮮麗な絵模様。
- 2月22日 石室の実測開始。
- 2月25日 発掘作業終了。
- 2月27日 石室写真撮影。
- 3月31日 多大な成果をおさめ、無事、王墓山古墳の発掘調査完了。輝かしい成果は、作業員の皆様の熱心な働きのおかげ。心よりお礼申し上げます。

### 3. 立地と環境

弘法大師誕生の霊跡、総本山善通寺の背後には、五岳山を形成する香色山、筆ノ山、我拝師山といった丘陵が連らなるが、その南麓から大麻山の山麓にかけては多数の遺跡が分布する。なかでも注目されるのは、王墓山古墳を含む九基の前方後円墳である。そのうち鶴が峰二号墳は破壊されたが、他はほぼ原形を止めている。野田院古墳は大麻山の標高400m地点にある前方後円墳であるが、前方部は土盛りであるが、後円部は積石になっており、主体は竪穴式石室である。丸山古墳も、積石による前方後円墳であるが、立地は標高150m前後の高地にあり、野田院古墳と共に、他の前方後円墳が低い尾根先端部に築造されているのとは対症的なあり方を示している。おそらく四世紀代に位置づけられる古墳であろう。

五世紀の古墳としては、刳抜式舟形石棺を出土した磨臼山古墳があり、鶴が峰二号墳も方形に近い竪穴式石室であったというから、五世紀代であろうと思われる。大池の西方丘陵にある北原古墳は、内部主体が横穴式石室であったが、開墾によって破壊され、王墓山古墳との前後関係を検討できないのは残念である。菊塚は大池の堤の直下にあり、鶴が峰の西裾に北向八幡古墳が所在する。後期古墳は大麻山の北麓に岡谷古墳群、県指定史跡に指定されている宮が尾古墳が注目される。宮が尾古墳は両袖型の横穴式石室で、石室内部の奥壁や側壁に舟、騎馬人物、人物などの線刻画が描かれている。六世紀後半の古墳である。線刻画は岡古墳の五号墳にもみられるが、ここでは家らしいものもあるが全体的に判読し難い描線が多い。岡古墳群は十四基の古墳が知られているが、現存するものはそのうち七基で、いずれも横穴式石室が開口する。その他後期古墳としては瓦谷古墳、御館古墳伏見奥古墳群などがあげられ、四世紀から七世紀にいたる古墳文化の展開をたどることができる。このような古墳文化の高揚は、それに先行する弥生文化の基盤がなければならぬことは云うまでもない。弥生時代の遺跡としては青銅器の出土に注目すべきものがある。

瓦谷遺跡は銅剣、銅鉾など八口が出土し、その西500mの殿林からも平形銅剣七口が出土したと云われている。瓦谷遺跡から北に大池をはさんだ500mの北原遺跡は銅鐸二口の出土が伝えられており、その一口は志度町多和文庫に保管されている。これらの青銅器は、それぞれ出土の地点を異にするものの、有岡という極く限られた谷水田を共有する同一集団の所産であることは云うまでもない。さて王墓山古墳は、いまみてきたように、立地からいっても、時代的にも弥生時代から古墳時代、そして古代へと大きな歴史的展開の中に位置づけられていくことになるわけである。



第1図

- |      |      |           |           |        |          |           |         |          |     |      |      |       |        |        |        |       |
|------|------|-----------|-----------|--------|----------|-----------|---------|----------|-----|------|------|-------|--------|--------|--------|-------|
| 17   | 16   | 15        | 14        | 13     | 12       | 11        | 10      | 9        | 8   | 7    | 6    | 5     | 4      | 3      | 2      | 1     |
| 北原銅鐸 | 伝導寺跡 | 我拝師山銅剣(B) | 我拝師山銅剣(A) | 我拝師山銅鐸 | 南原遺跡(銅剣) | 瓦谷遺跡(銅剣鉾) | 丸山積石塚古墳 | 野田院積石塚古墳 | 善通寺 | 北原古墳 | 菊塚古墳 | 王墓山古墳 | 北向八幡古墳 | 鶴方峰二号墳 | 鶴方峰一号墳 | 磨臼山古墳 |

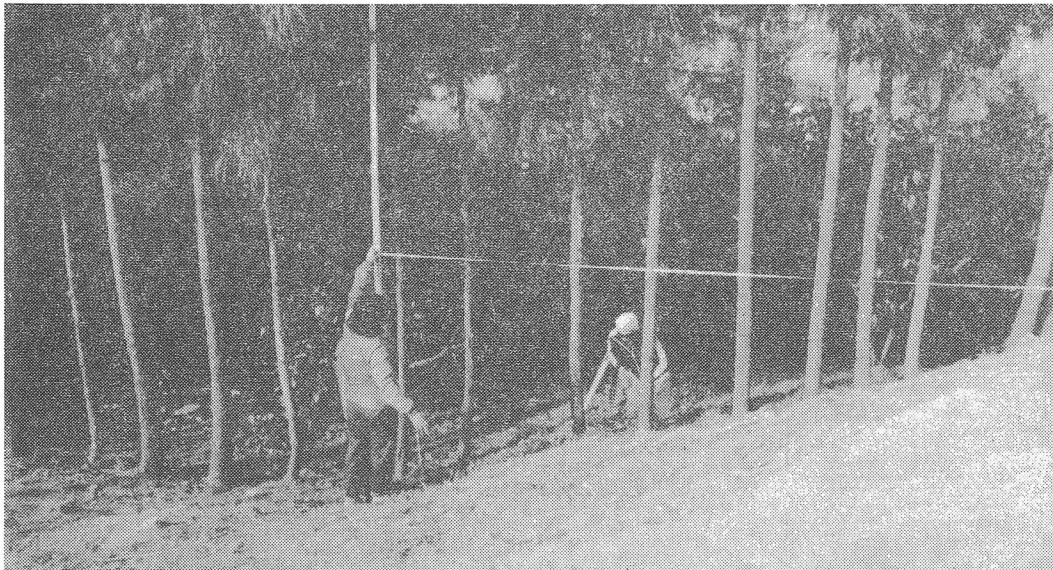
#### 4. 墳丘について

大麻山の北西麓には、市街地から東西に併走する2本の県道（善通寺大野原線、善通寺観音寺線）に挟まれた狭長な微丘陵水田地帯が広がる。王墓山古墳は、その中ほどにひときわ荘厳な姿を横たえる前方後円墳である。かつては陪塚7基を従えていたといわれ、今もその面影が偲ばれる。また、後円東北基部からは箱式石棺の発見が伝えられている。発掘前は、墳丘一面枝を触れあうように密柑の木々が生い茂り、墳丘に緑の景観を醸していた。

本墳は、独立小山塊に盛土築成して墳丘となし、古墳としての偉容をととのえている。主軸線を南西-北東にとり、前方部を西、後円部を東にもつ。前方部の南半は削られ、崖面が顔をのぞかせている。

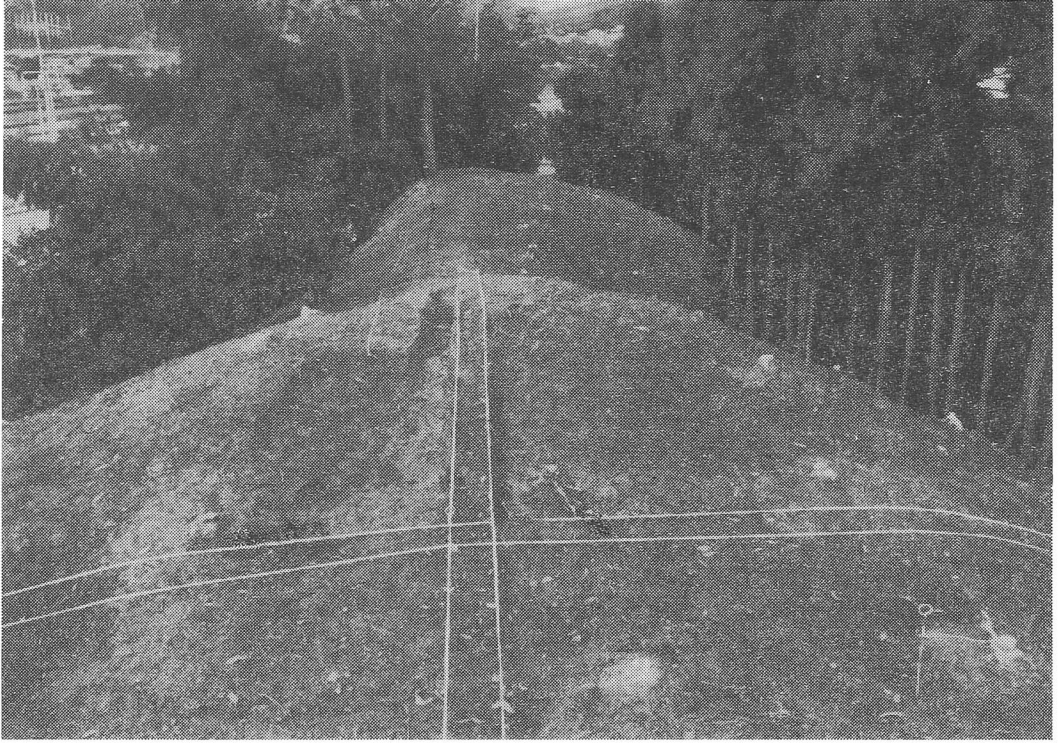
墳形確認のために、墳丘地形測量と斜面部トレンチ試掘調査を行った結果、墳丘の全容がほぼ明らかになった。墳丘は、もとの地山を上下2段に整形している。上段では段裾を思わせる石列の一部を確認し、下段には墳裾を示す段落ち整形が顕著である。整形後は、膨大な量の盛土築成を行っている。墳丘を登るに従って盛土は次第に厚さを増し、墳頂部では3m近くを測る。築き方は、粘土と砂の互層によるいわゆる版築技法を採用し、墳形の現出と維持への配慮がなされている。

規模は、全長約45m、前方部幅20m余り（推定）、後円部径約25mを測る。後円部墳頂から墳裾までの比高差5mを測る。前方部と後円部との比高差は少ない。また、前方部における墳頂から墳裾までの距離は比較的長い。前方部が肥厚した中期古墳としての墳形的特徴を示す。

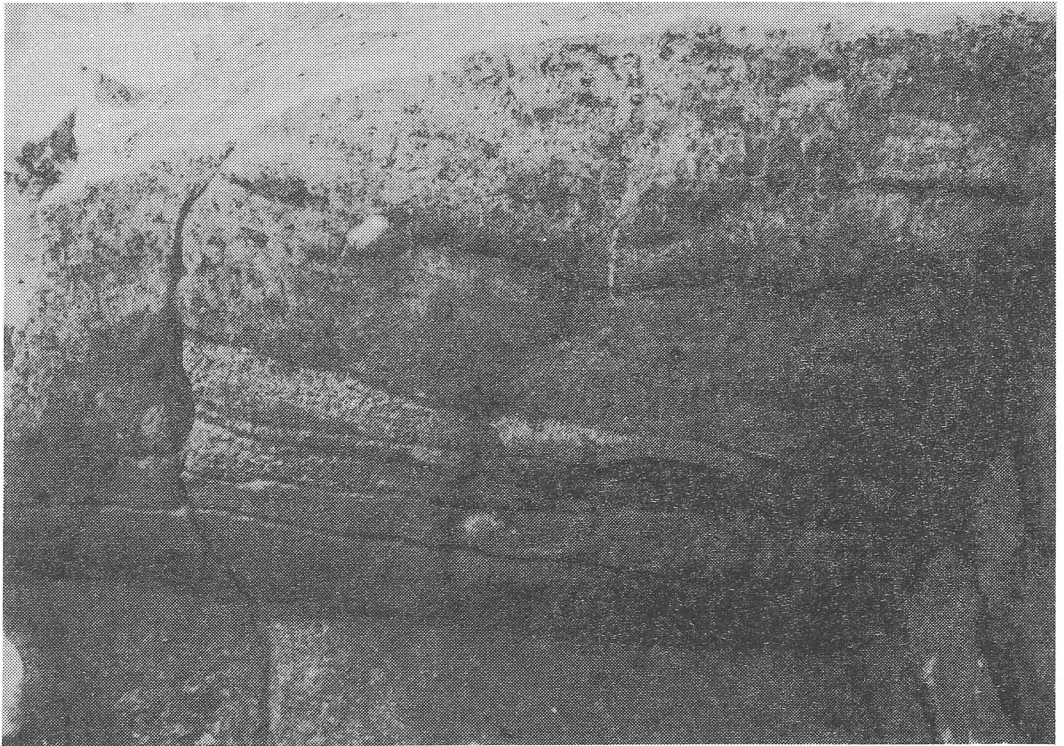


第2図 墳丘地形測量風景



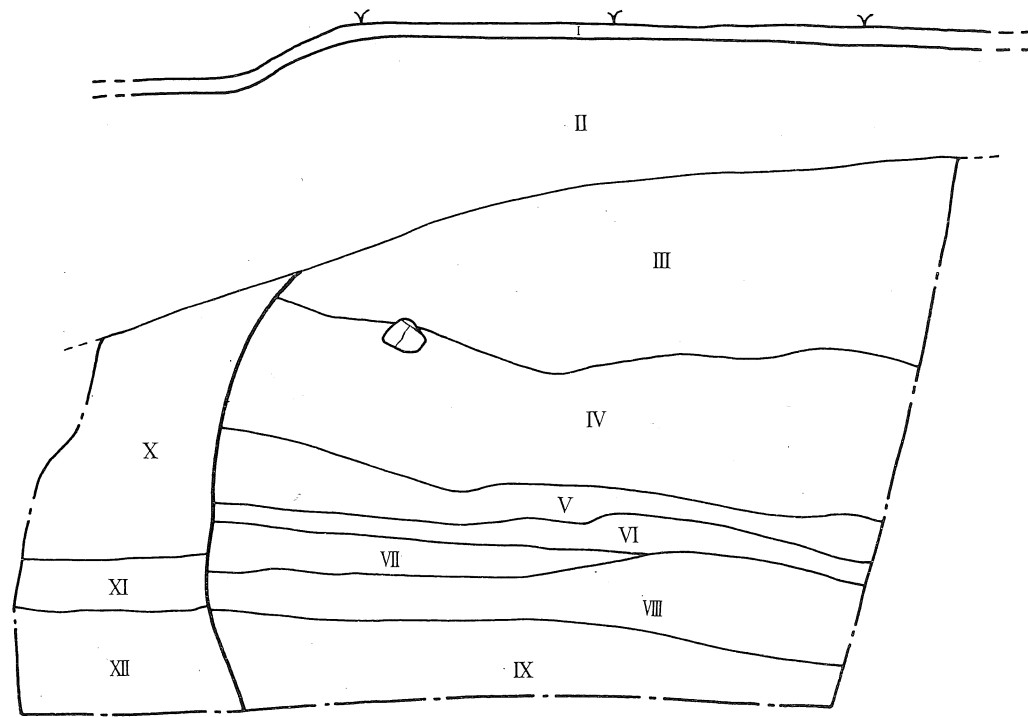


第3図 墳丘（後円部東より前方部を見る）



第4図 墳丘土層（後円部）

墳丘土層図

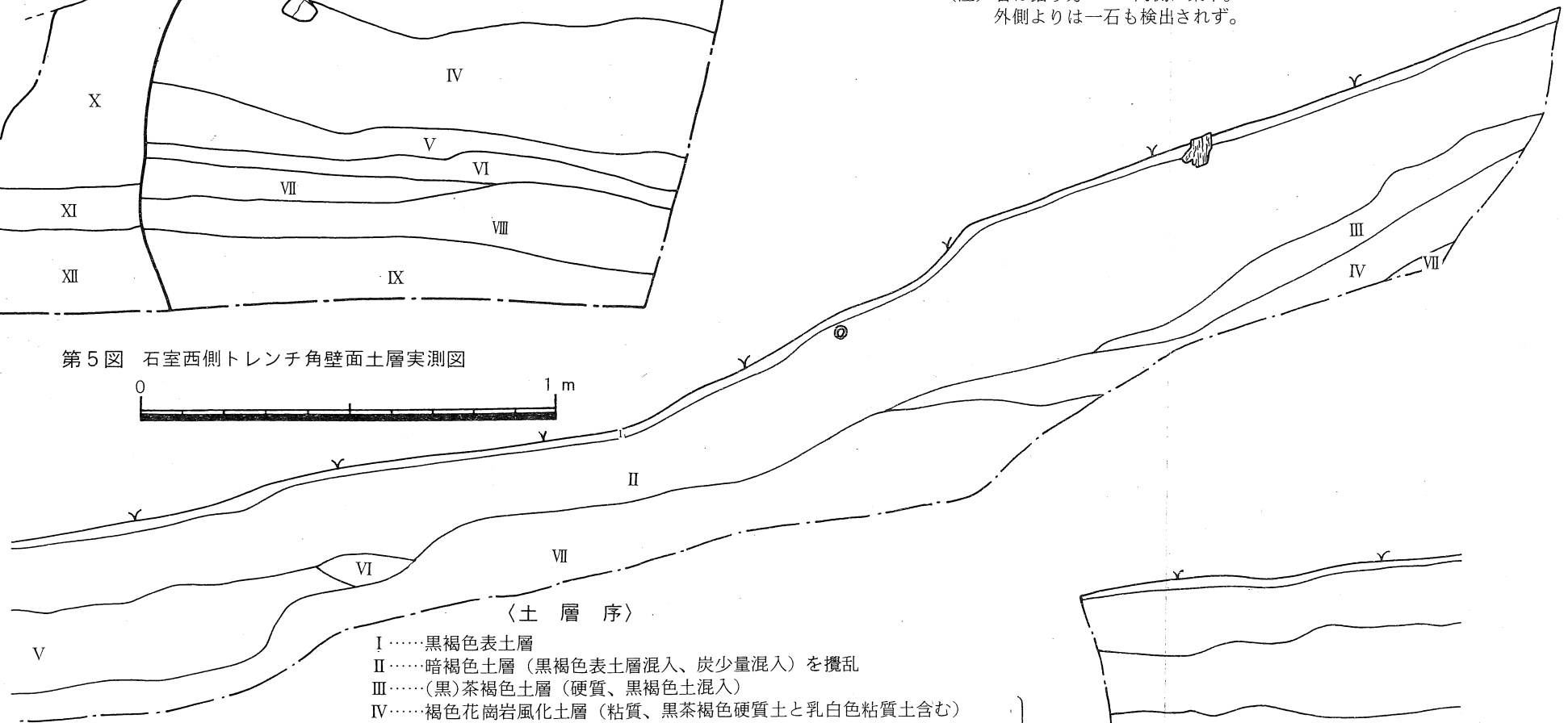


第5図 石室西側トレンチ角壁面土層実測図



〈土層序〉

- 版築が顕著
- I …… 褐色土 base (+ 黒茶褐色 + 黄褐色土)
  - II …… 明褐色粘土層 (やや赤味を帯びている)
  - III …… 明灰黄褐色砂層
  - IV …… 茶褐色粘質土層 (硬質化している)
  - V …… 明褐色砂質土層 (花崗岩小 block 混入)
  - VI …… 明褐色粘土層
  - VII …… 明灰茶褐色砂質土層
  - VIII …… 明褐色粘質土層 (黒褐色粘混入、砂及び花崗岩小 block 混入)
  - IX …… 明灰黄色粘土 (石葺覆用)
  - X …… 褐色粘土 (黒褐色粘質土混入)
- (注) 石は掘り方 line の内側に集中。  
外側よりは一石も検出されず。



〈土層序〉

- I …… 黒褐色表土層
- II …… 暗褐色土層 (黒褐色表土層混入、炭少量混入) を攪乱
- III …… (黒)茶褐色土層 (硬質、黒褐色土混入)
- IV …… 褐色花崗岩風化土層 (粘質、黒茶褐色硬質土と乳白色粘質土含む)
- V …… 暗褐色土層 (純層で控乱を受けていない)
- VI …… 灰褐色粘土層 (塊) - 埴輪抜きとりの跡かも知れない
- VII …… 灰白色 (乳白色) 及び褐色の粘質土層 (両方とも花崗岩の風化したもの) 湿潤な自然条件のために粘質化したものと思われる。

地山層

第6図 後円部墳丘東斜面トレンチ南壁面土層実測図





第7图 填丘地形測量图

## 5. 石室について

後円墳丘中央部より、墳丘主軸線にほぼ直交する横穴式石室1基を検出した。横穴式石室を埋葬主体にもつ前方後円墳としては、近くに北原古墳の存在が知られているが、発掘調査によって実際に検出された例は県下になく、本墳が初めてである。

石室は、南南東に開口し、矩形の玄室中央部に狭長な羨道の続く、両袖型横穴式石室である。壁石には、一部花崗岩の混入をみる他は、すべて安山岩を使用している。安山岩は古墳南隣の秀峰大麻山に多量に産することから、それを運搬使用した可能性が高い。

玄室壁は、扁平な小形安山岩割石を用い、木口面を内に向けて10数段積み重ねている。上段へ行くに従って、持ち送り気味に内傾している。竪穴式石室の面影が残り、竪穴→横穴移行期の形態を示す。袖石には比較的大きな扁平安山岩を使用しているものの、やはり数段積み重ねている。羨道壁の大半は、丸味を帯びた安山岩が占める。玄門部には、きれいに整形された凝灰岩の一枚石が閉塞扉として立てられており、まさに圧巻である。天井蓋石は、古くから取り除かれていたために、石室検出時には発見されなかった。玄室床面は、平たく整形された地山（花崗岩風化）の上に安山岩扁平小割石を多く含む灰黄青色粘土を薄く敷き、さらに、花崗岩小礫を含む明褐色土を置き、表面に玉砂利を隙間なく並べている。床面上には、後に掲げるが、金銅製装身具及び馬具類を始め、県内では珍しい、豪華優美な副葬遺物がほぼ全面に満たされていた。

ところで、玄室内部施設として、県下ではもちろん初めて、瀬戸内一帯でも数少ない「石屋形」が検出された。屋形は、長側壁の一方（奥壁）を石室側壁と共有し、石室奥壁に接して1枚、それと平行して1枚の凝灰岩板石を立て、短側壁としている。前側長側壁中央部は浅い幅広U字形に面取りされ、山陰出雲地方の横口式家形石棺をほうふつさせる。けれども、1枚の巨岩ではあるが明らかに天井石が架構されており、「石屋形」としての形態をもつ。「石屋形」は九州、なかでも肥後地方に濃密な分布を示すが、本墳でも検出されたことから、何らかの伝播経路及び文化的交流が考えられる。と同時に、横口式家形石棺との関連をも考慮しておかなければならない。詳細は、今後の研究に委ねたい。

最後に、屋形東側床面に屋形の壁石を割り敷いて棺台とした形跡が見られること。副葬須恵器に時期差が見られること。さらに、遺物が2次的に動かされた状態で検出されたことなどから、追葬の可能性を指摘しておきたい。

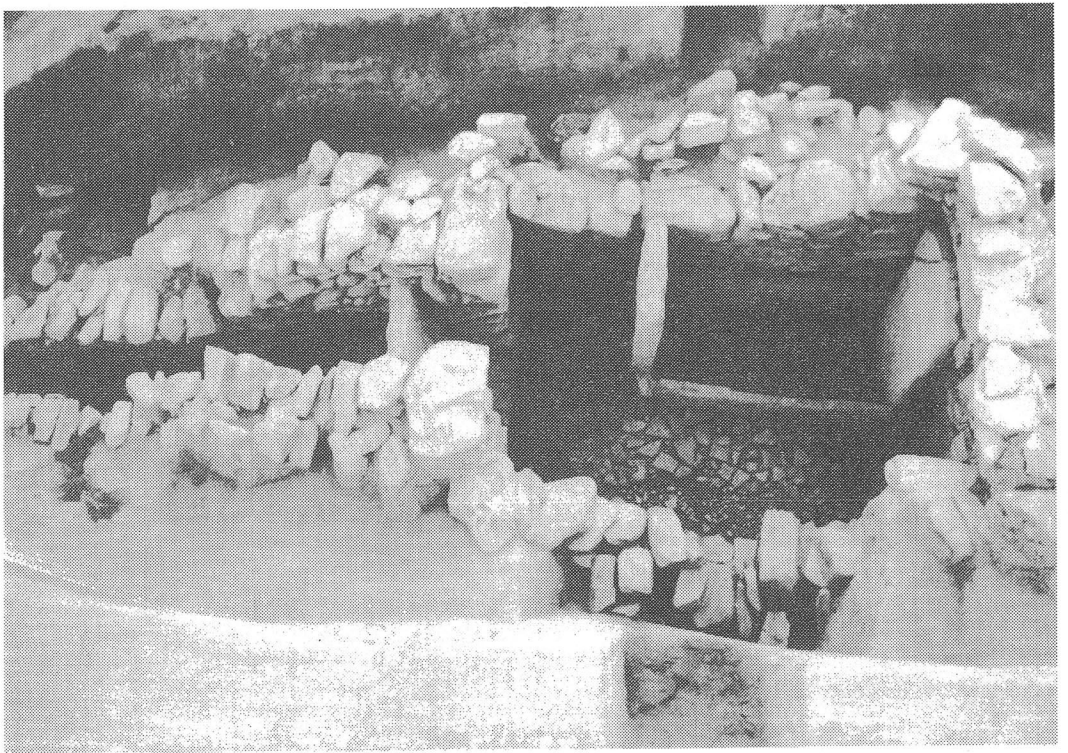
尚、石室規模を明記しておく。

### 〈石室及び屋形の計測値〉

部 位	計 測 値	部 位	計 測 値
全 長	約 7.50m	屋 形 長 側 壁 上 端 長 下 端 長	約 1.90m
玄 室 長	約 3.00m		約 1.85m
羨 道 長	約 4.50m		屋 形 短 側 壁 上 端 長 下 端 長
玄 室 幅	約 1.80m	約 0.85m	
羨 道 幅	約 0.75m	屋 形 高	
玄 室 高	2.00m以上		
羨 道 高	1.50m以上		



第8図 石室上面石検出状況



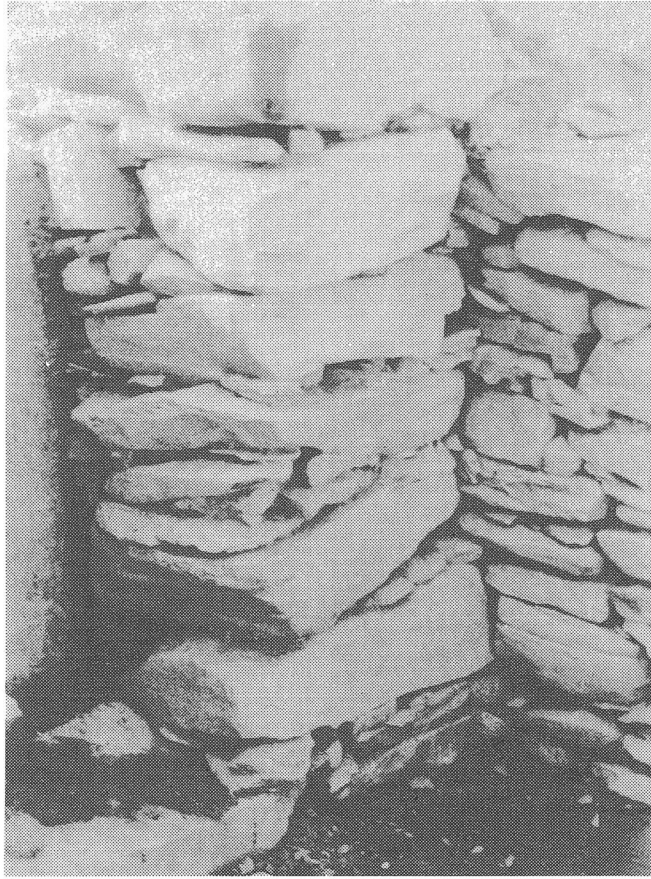
第9図 石室全景（東側より写す）



第10図 石室全景（南側より写す）



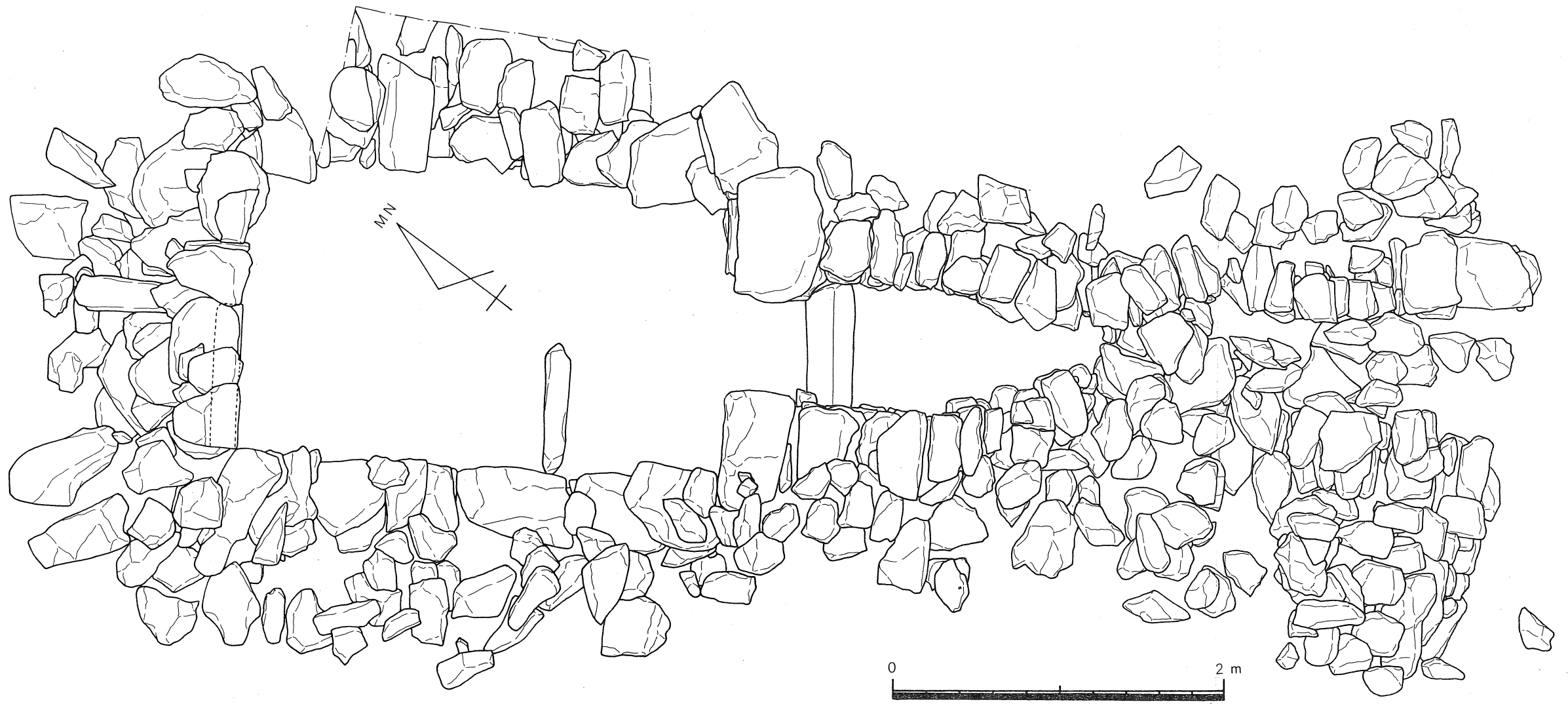
第11図 石室全景（北側より写す）



第12図 玄室裾石壁附近

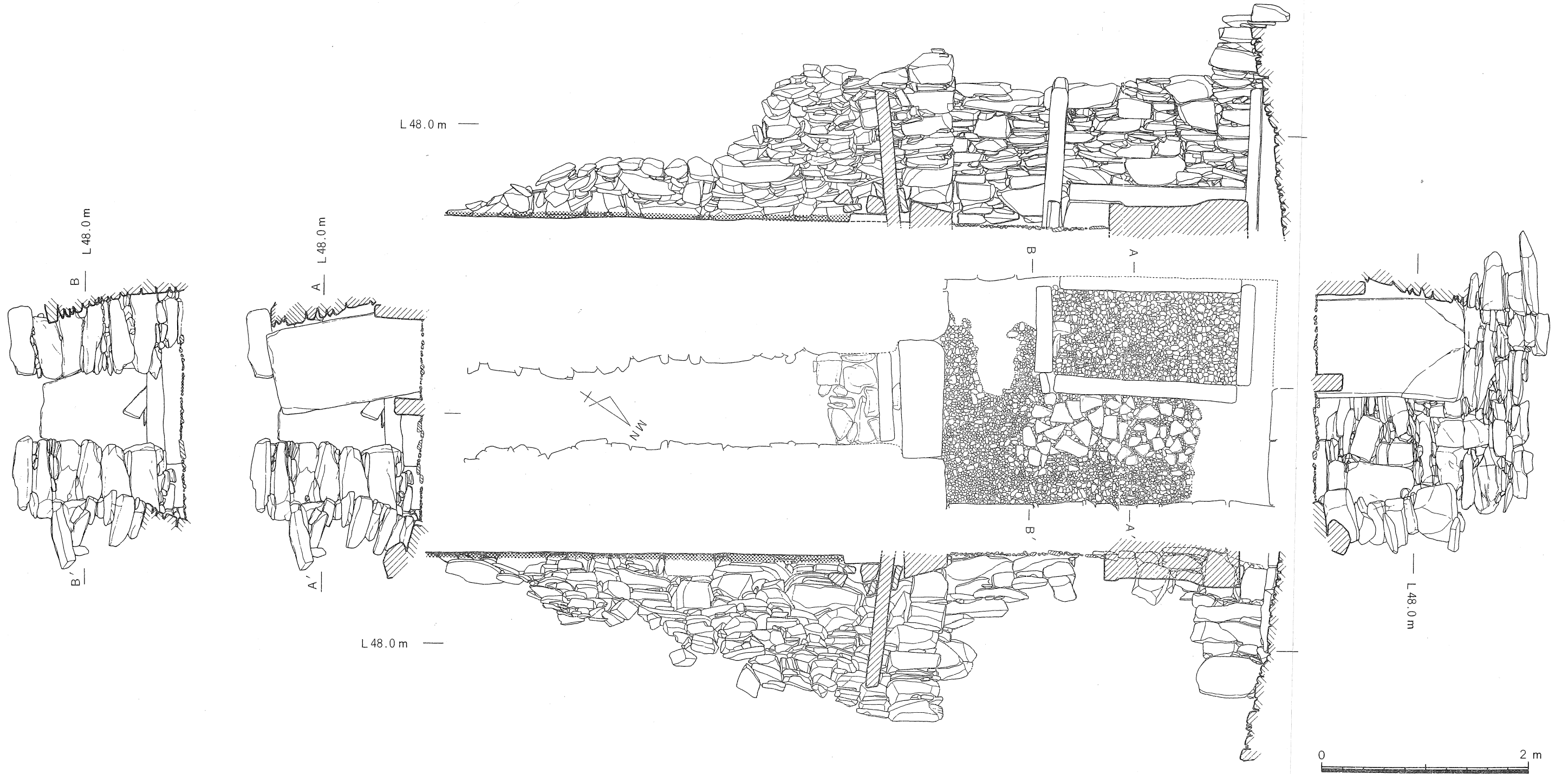


第13図 玄室西側壁



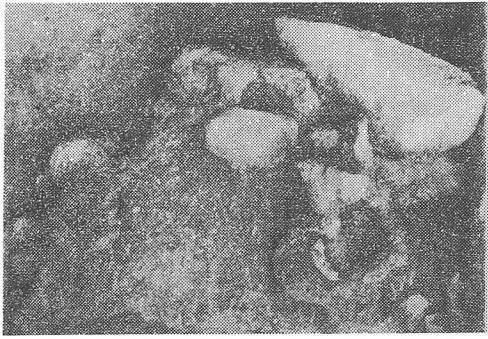
第14图 石室上面实测图（平面图）



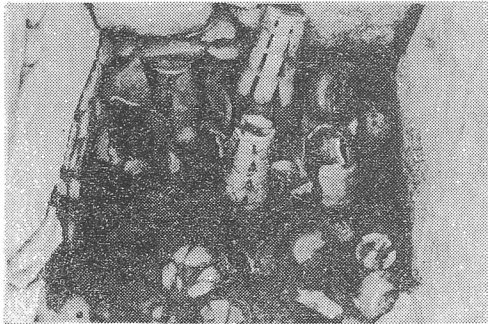


第15图 石室実測图

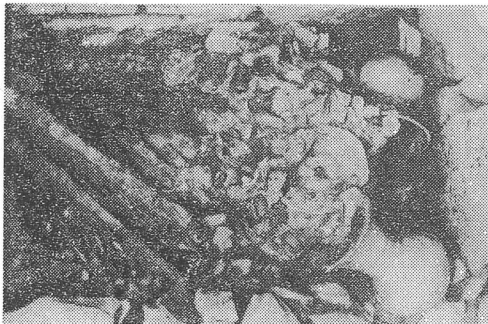
## 6. 遺物の出土状況



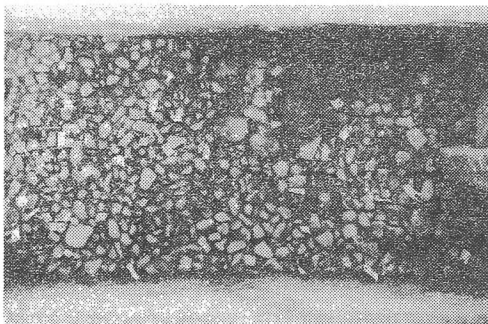
第16図 金銅製冠帽及び馬具出土状況



第17図 須恵器出土状況



第18図 鉄製品及び馬具出土状況



第19図 玉類出土状況

石室より検出された遺物は、種類・数量ともに豊富で、質的にも豪華である。金銅製冠帽を始めとして、馬具にも金銅製（鉄地に金銅張り）のものが多い。他に、膨大な量の須恵器や鉄製武器（具）。装身具など、目を驚かすばかりの出土である。これらの遺物は、石室全面をくまなく埋めていた。

ところで、遺物の分布をつぶさに観察すると、ある特徴に気づく。須恵器は、玄室南側部分から集中して出土した。平瓶を除いて、ほぼすべての器形が認められる。鮮麗優美な透し付器台を始め、脚台付き子持ち壺、提瓶横瓶、甕などさまざまな種類のものが雑然と重なり合うさまは圧巻である。状況から判断して、2次的移動は疑いない。また、玄門部閉塞扉石前に不が3セット置かれていた。馬具及び鉄製品は玄室奥壁附近に山積していた。金銅製の馬具や馬鈴、挂甲など一塊をなして検出された。その中に鉄鏃が多数含まれていたのも注意をひく。

屋形内は、何といたっても金銅製冠帽がきわだっている。床面上にある落壁の上に置かれていたことから、原位置が保たれていないのは惜まれる。また、屋形内からも、馬具や須恵器類が検出されている。馬具としては、鉄地金銅張りの鏡板付轡や鉄製輪鐙があり、須恵器には高坏、甕などが見られる。さらに、内部一面に敷きつめられている玉砂利の間からは金環、銀環を始め、水晶製切子玉、碧玉製管玉などの装飾品が多数出土した。

王墓山古墳出土遺物一覧表

番号	種類	名称	出土点数		
1.	須恵器	器台	4		
		脚付子持ち壺	2		
		大型壺	2		
		長頸壺	4		
		短頸壺	2		
		提瓶	3		
横瓶	2				
罍	3				
高杯	4				
坏蓋	33				
坏身	32				
2.	土師器	壺	1		
3.	馬具	f字形鏡板付轡	} (鉄地金銅張り)	2	
		扁円形鏡板付轡		2	
		銅製鈴付大型雲珠		1	
		雲珠		3	
		剣菱形杏葉		2	
		鐙		2	
		馬鈴		3	
		鉸具		3	
辻金具	1				
4.	武器	挂甲	1		
5.	武器	金銅製鏢付鉄刀	1		
		鉄刀	4		
		鉄鏃	多数		
6.	装身具	金銅製冠帽	1		
		(耳環)			
		金環	1		
		銀環	6		
		滑石製有孔円板	1		
		(玉類)	計 418		
		水晶製切子玉	8	翡翠製勾玉	1
		瑪瑙製棗玉	3	銀製空玉	15
		瑪瑙製小玉	1	銀製玉	1
		碧玉製管玉	29	滑石製小玉	1
		ガラス製白玉	71	土玉	283
ガラス製小玉	5				
7.	その他	砥石	1		

- (注) 1. 遺物は整理途中なので、3月17日現在までに明らかな点数を記した。  
 今後、点数は増えるものと思われる。詳細な数値は、後日、整理終了後の報告を待たれたい。
2. 須恵器は、大半が破損していたので復原数値を記した。



第20図 遺物出土状況面 平面図

## 7. 出土遺物について

### 1. 馬具・武具

#### (1) 轡 (21. 22)

##### ① 鉄地金銅張楕円形鏡板付轡 (21)

長径11.0cm、短径9.5cmの楕円形鏡板。周縁の縁金（幅0.7cm）と中心の小円形（径2.5cm）及び十字形には別の鉄板が装飾的に張られて鉾留めされている。立間は、幅2.7cm、長さ0.8cmの方形で鉤が装着されている。中央の小円形が蓋状金具なのか、単なる装飾なのか不明確であるため杏葉の可能性もある点を付す。

##### ② 鉄製環状鏡板付轡 (22)

環状鏡板付轡であろうと思われる。第27図にも同様のものがあり、ともに径8.5cmを計り断面円形。連結部の銜、引手の状況は現段階では不明である。

##### ③ 鉄地金銅張 f 字形鏡板付轡 (23)

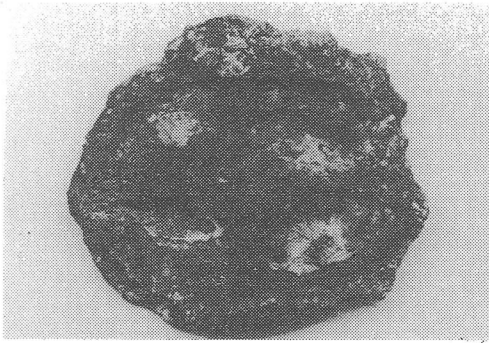
長さ21.0cm、幅7.0~8.0cm。外面周縁と中央の楕円形枠（長径5.0cm、短径3.5cm）には別の鉄板が張られる点は楕円形鏡板、杏葉と同巧である。中央の半球状蓋状金具と長方形の立間が完存している。表面は緑青がふき、金箔がキラリと光る。剣菱形杏葉と相応。

#### (2) 鉄製輪鐙 (24)

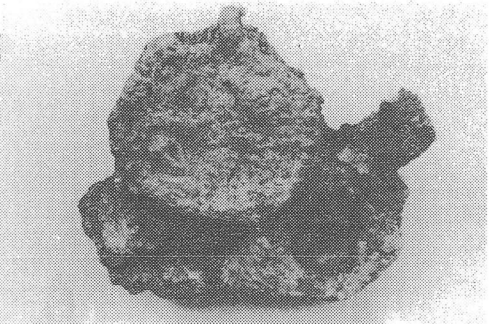
輪の幅18.0cm、高さ12.0cm。踏込み部分は直線的で断面も楕円形を呈し、他の部分と異なる。柄部は現在長10.0cm、幅2.5cmの板状鉄板。懸垂用の方孔は欠損している。足のすべりを防ぐ突起部分及び柄部と接合状況は現状では確認できない。

#### (3) 鉄地金銅張雲珠 (25. 26)

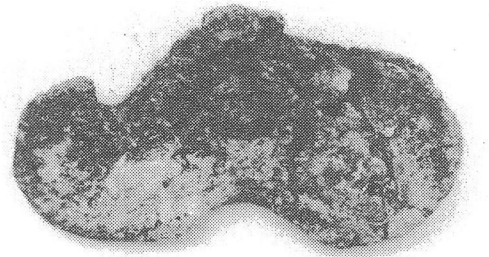
全面に淡緑白色の緑青がふく。径20.0cm。中央の青銅鈴装着部径8.5cm、高さ2.0cm。周囲には、8個の半球状の脹らみがあり、径2.5cm、高さ1.5cmを計る。裏面には目の細かな格子縞織物と木質が張り合わされている。尻繫などを結合する脚の有無は確認できない。



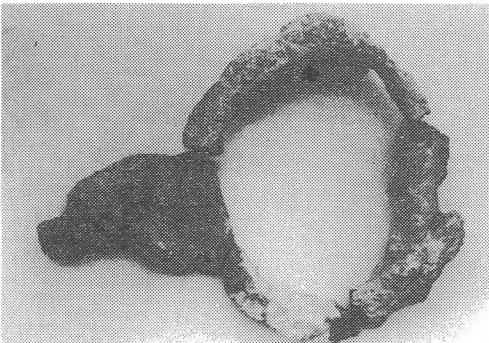
21



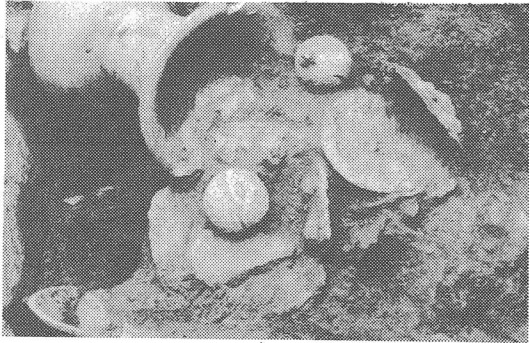
22



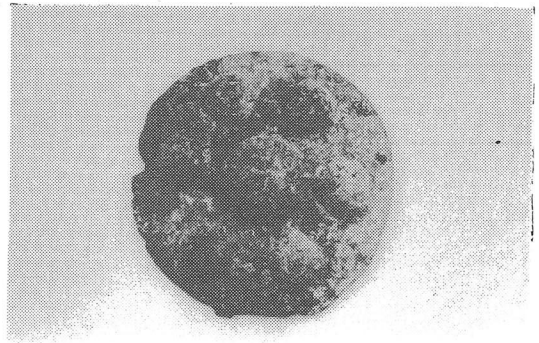
23



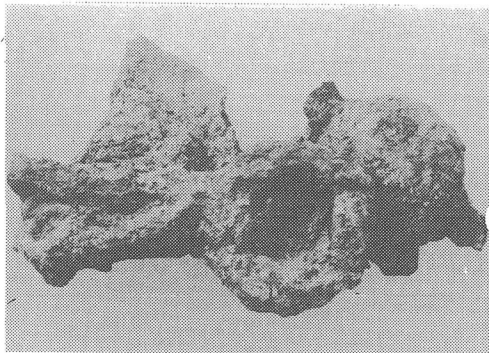
24



25



26

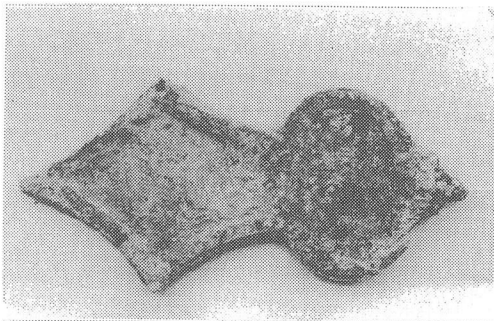


27

同様の円形で半球状の脹らみを持つものが3個出土しているが、それらも脚の存在が不明。径11.5cmで中央の脹らみ径3.5cm。周囲には6個の脹らみがあり、雲珠なのか杏葉なのか判断しがたい。

(4) 辻金具 (27)

鉄製環状鏡板付轡の右に伏鉢形で3本の方形脚（こはぜ形かもしれない）を持つ辻金具が確認できる。全幅11.5cm、伏鉢径8.0cm、高さ2.5cm。他の馬具量から推察すると量的に少ない。



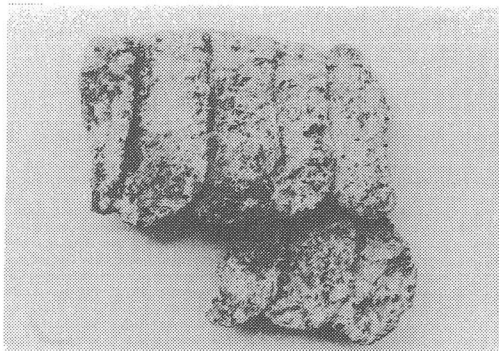
28

(5) 鉄地金銅張剣菱形杏葉 (28)

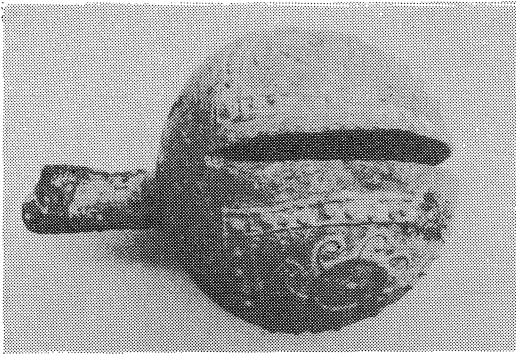
全長18.5cm、扁円形部の幅9.0cm、長さ6.0cm、剣尾形部の長さ12.5cm、最大幅9.7cm。1枚の鉄板で整形後、周縁に幅0.8cmの鉄板を張りつけ装飾的な縁取りを意匠化している。方形の立間は確認できるが、表面模様の有無は不明。他に1点、同様のものが出土しているが腐食が進行している。f字形鏡板付轡とセット。

(6) 挂甲 (29)

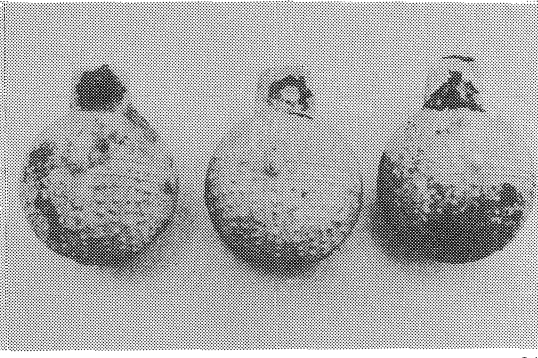
長さ7.0~7.5cm、幅3.0~4.0cmの小札を左右上下に重複連続後、方形端部を皮革様物質で縁取りしている。他に錆着した塊有り。



29



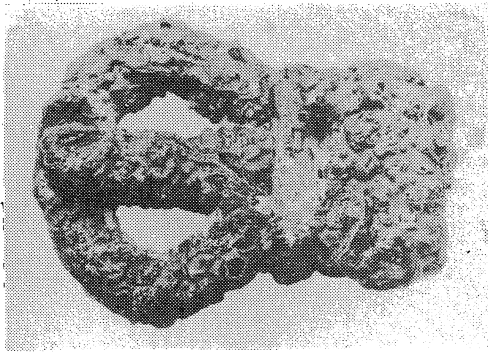
30



31

(7)青銅製馬鈴(30. 31)

球形で1文字1透孔の青銅製鈴が4個出土。雲珠の中心に突き立った状態で出土した鈴は、大きさ、模様が他の3個と異なる。径6.0cm、装着棒長3.3cm、円形断面0.8cm、孔幅0.5cm。蕨手文が $\frac{1}{4}$ 円に画された中に描かれている。その枠には小さな珠文が密に並んでいる。他の3個には、全て垂下用の方形立聞が付く。径5.6cm。十字形に画された片面空間には珠文が轟めく。十字帯中央には円錐形で先がやや尖る珠文がある。



32

(8) 鉸具(32)

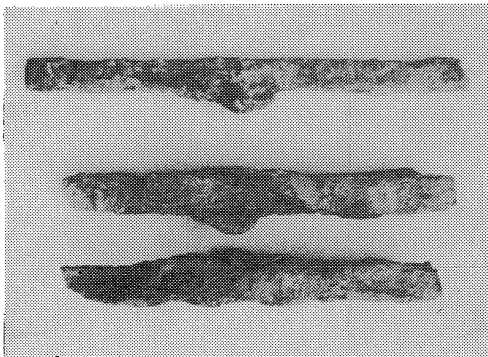
帯の留金具で、楕円形の環基部から刺金(長さ2.8cm、幅0.8cm)がのびる。裏面には皮革が錆着し、環と帯の接合部にも木質が食い込んでいる。どの部分の鉸具なのか不明。他にも方形の鉸具が2点出土している。



33

(9) 鉄刀(33. 34)

金銅製鐔付鉄刀が出土している。鐔は倒卵形で縵紐状に作られ、縁には覆輪を付す。鐔の高さ7.3cm、最大幅5.4cm、刀身幅6.0cm。鉄刀は5振前後出土しているものと思われる。

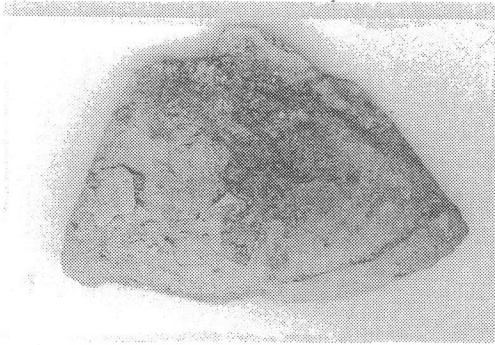


34

## 2. 装身具

### (1) 金銅製冠帽 (35)

非常に薄い4枚の三角形状被覆板は頂部からの細い金銅板(4本)で押えられ留められている。縁部は中央に密な連珠文風模様を配した帯で縁取られる。折り返しではないようで、一部に糸状の布が付着している。表面は、金銅の金箔が1500年の眠りから目覚めたように光輝を放っている。左右27.0cm、上下17.0cm。



35

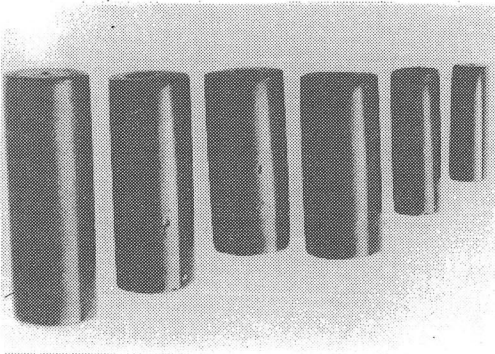
### (2) 玉類・環類

碧玉製管玉 (36) ガラス製白玉 (37)

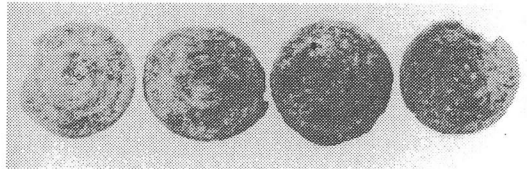
土製丸玉 (38) 銀製空玉 (39)

水晶製切子玉 (40) 勾玉 (41) 棗玉 (42)

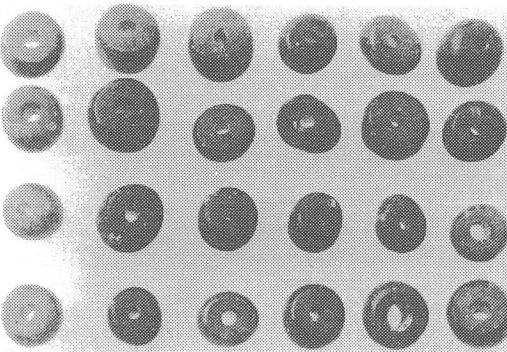
金環 (43) 銀環 (44)



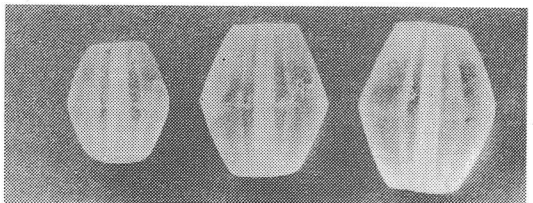
36



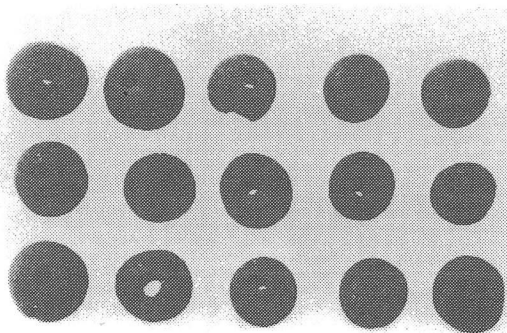
39



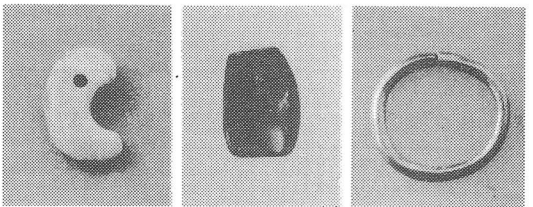
37



40



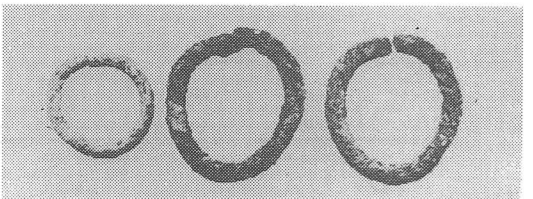
38



41

42

43



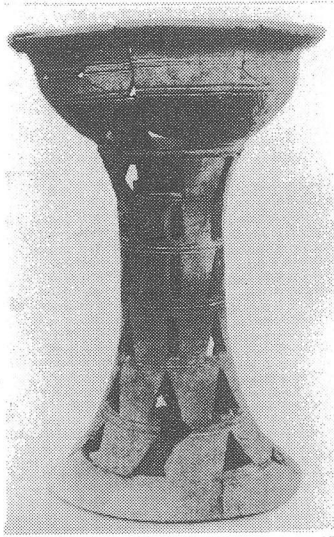
44



### 3. 須恵器

#### (1) 器台 (45. 46)

(第45図 口径36.4cm、器高53.0cm、脚端径30.5cm)  
(第46図 口径31.6cm、器高36.6cm、脚端径22.7cm)



45

鉢状に脹れた坏部が6段透しの脚台に載る。外面上方には櫛状工具による刺突文が太めの沈線で画された平面空間を埋める。下方は平行叩き調整。口縁端部は上方にのびた後、外縁外側に肥厚している。脚台部と坏部の接合部では2条の沈線により突出した突帯にきざみ目が施されている。脚台部は中央部まで直下した後、大きく外反し安定度を高めている。透しは5方向に穿孔されているが必ずしも等間隔ではなく、前後を意識して製作されているように思われる。(第45図)

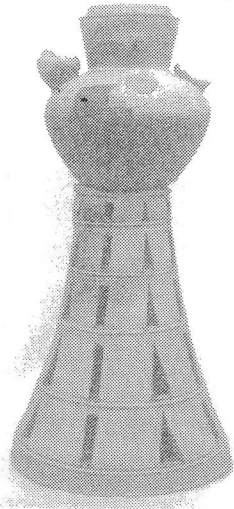


46

坏部は緩やかな内彎ラインを描き口縁部に至る。坏部上方には2本の沈線による削り出し突帯の上下に櫛描波状文が施され、その下方から底部にかけては擬似格子叩きで器面調整されている。脚台部は、やや外反しながら下がるが、端部近くで内彎する。丸味のある三角形の透しが4段3方に穿たれている。透孔段には各2条の櫛描波状文が施されている。(第46図)

#### (2) 脚台付子持ち壺 (47. 48)

(第47図 口径10.2cm、器高58.6cm、脚底径27.0cm)



47

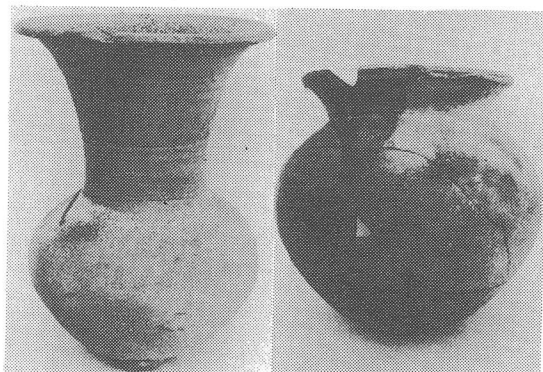
高さ6cm程の子壺4個を肩部に持ち、5段透しの脚台に載る壺。直線的にのびる口頸部には、ヘラ先様工具による線刻文様が巡る。頸部端には蓋受けのたちあがり有す。壺底部と脚台部の接合部には、坏部の存在を思わせる折断面が確認できる。脚台部の透しは8方向に三角形、長方形が交互に穿たれ、各段には櫛描波状文が施されている。

(第47図)



48

第48図も脚台付子持ち壺で装飾的に5個の子壺を肩部に配す。口頸部は大きく外反し櫛描波状文を施す。体部中央から底部にかけては、平行叩きで器面調整。4段透しで櫛描波状文を施す脚台に載る。



49

50

## (3) 大型長頸広口壺 (49)

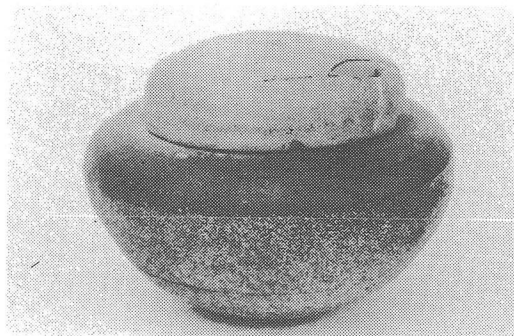
(口径19.7cm、器高28.0cm)

体部底面が丸く尖り、口頸部は緩々と外反しながら口縁部に至る。櫛描波状文を上下2条の沈線が挟む。体部の器面調整は上方 $\frac{1}{2}$ が回転カキ目、下方 $\frac{1}{2}$ が平行叩き。濃深緑色の自然釉が口縁部より底部にかけて流溢に施釉される一面がある

## (4) 壺 (50)

(口径15.8cm、器高18.7cm、体部最大径18.2cm)

口頸部は短かく鋭く外上方に開く。口縁端部は外縁外側に肥厚し、断面方形を呈す。外面は擬似格子叩き、内面底部は同心円叩きにより器面調整。焼成良好。



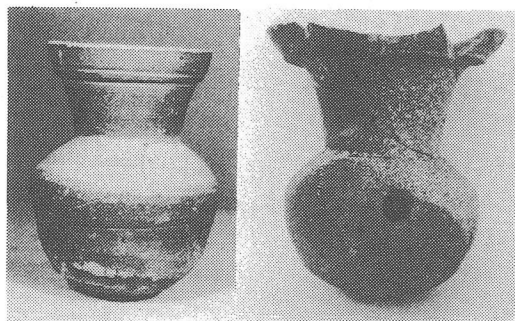
51

## (5) 短頸壺 (51)

(壺 口径8.0cm、器高9.3cm、体部最大径13.2cm)

(蓋 口径9.5cm、器高3.2cm)

口頸部が緩く内彎して直立する直口壺で丸底ながら安定感がある。肩部より底部にかけては回転へう削り調整。この壺には口縁部が垂直に下り、端部でやや外反し、端部内面で段を持つ蓋が付く。



52

53

## (6) 長頸壺 (52)

(口径10.5cm、器高16.0cm)

体部は高く、肩部から底部までがやや垂直気味に下る。口頸部は口縁部まで直線的のび、基部は太い。回転カキ目調整。口縁部は明瞭な段と段直上に1条の沈線を持つ。

## (7) 罍 (53)

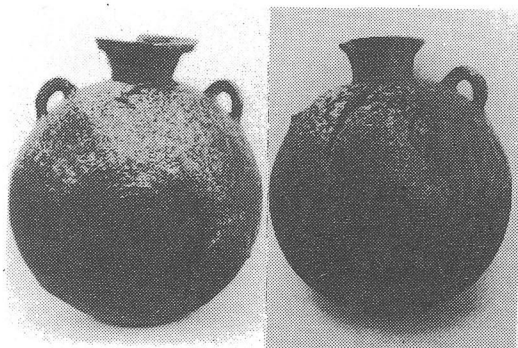
(口径12.1cm、器高12.0cm、体部最大径10.4cm、円孔径1.5cm)

口頸部は外反気味に立上り、口縁付近で外上方に屈曲し、明瞭な段をなす。口頸基部は太く、体部中央やや上位に円孔を斜上方から穿つ。

## (8) 提瓶 (54. 55)

(第54図 口径9.2cm、器高25.0cm)

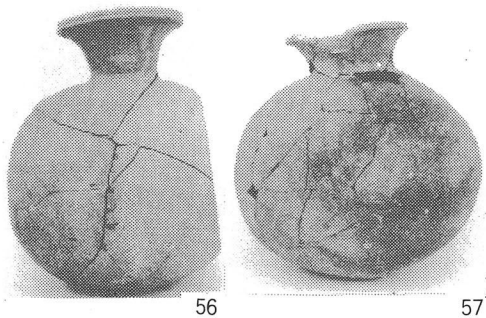
(第55図 口径6.4cm、器高18.5cm)



54

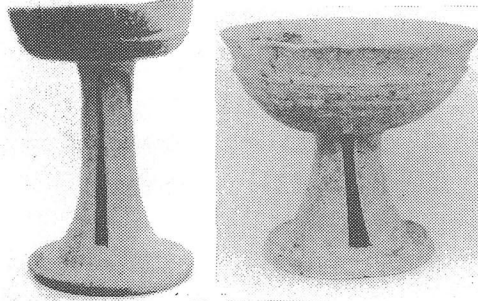
55

大形提瓶。体部の脹らみ面は、提瓶特有の回転カキ目調整。平坦面は調整が粗雑で指頭痕が顕著紊乱。体部側面には環状の把手を一对付す。口頸部は短く外反し、口縁部外面に



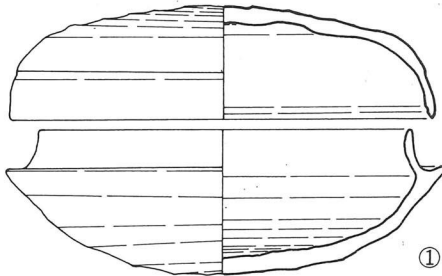
56

57

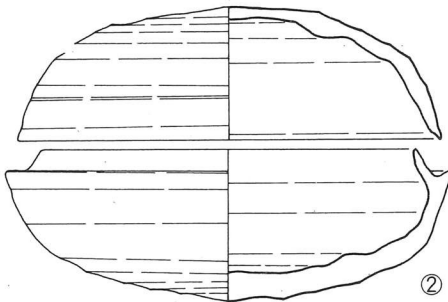


58

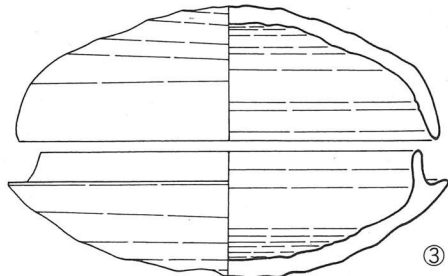
59



①



②



③



60

は明瞭な段。焼成堅緻の灰黒色器面に斑点状の黄灰色自然釉がかかる。第55図はやや小形。

(9) 横瓶 (56. 57)

(第56図 口径9.3cm、器高19.0cm  
体部最大幅14.0cm  
第57図 口径12.5cm、器高24.7cm  
体部最大径26.0cm)

第57図より小形。体部の片面は丸く他面は平坦である。器面外面は回転カキ目調整。口頸部はラッパ状に開き、端部は外方に肥厚し、外面に1条の沈線を巡らす。(第56図)

紡錘形の体部中央に基部の太い口頸部が接合する。口頸部は外反して口縁部に至り、端部で、平坦面を持つ。断面台形状の端部は外縁外側に肥厚する。(第57図)

(10) 高坏 (58. 59)

(第58図 口径11.0cm、器高16.2cm)  
(第59図 口径13.6cm、器高12.0cm)

第58図は坏部の口縁部は外反し、そのまま端部に至る。外面中央には1条の沈線が巡り、その直下に繊細で丁寧な櫛描波状文。スリムな脚には、1段透しが3方に穿孔され、端部は丸く内傾する。第59図は無蓋高坏。坏部は丸く深みがある。脚は緩やかに外反し、細長い方形透しが3方に穿孔されている。端部は外方に若干のびた後、鋭く屈曲し外傾する。

(11) 坏 (60)

実測図①は玄室南西隅の須恵器集中区、②は閉塞扉石外側の羨道、③は玄室東床面、出土の坏である。形態の特徴を次表にまとめる。

観点		坏	①	②	③
蓋	天井部と口縁部の境		段（段に近い沈線）	沈線	段、沈線なし
	天井部		平坦	やや平坦	丸味
	端部内面		段（段に近い沈線）	段（段に近い沈線）	段、沈線なし
身	たちあがり		外反あるいは直立気味 器厚は薄	内傾	やや内傾
	底部		平坦気味	平坦気味	丸味

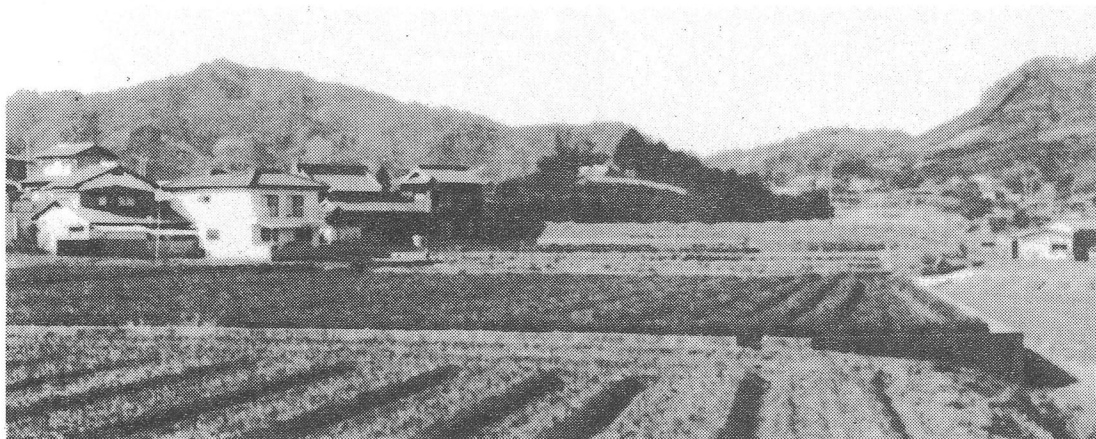
観察の結果、時期差は明瞭である。即ち①が最も古く6世紀中葉（6世紀前半の終り頃）に、②、③は6世紀後半に比定できよう。（③より②が若干古い要素を持つ）追葬が行われることを前提に、その追葬回数、時期を推察する際、②の取扱いが問題である。形態上の差異を別工人の製作によるものと推察した場合、②と③は同時期となり1回の追葬を意味するであろう。しかし②と③に時期差を考慮すると、葬送儀礼後、追葬した場合と③の時期に追葬と同時に葬送儀礼を行った場合が考えられる。もちろん2回の追葬も考えられる。追葬については、今回、坏の観察によりその可能性だけ羅列することに留め、他の副葬品等を考慮しての検討は、今後の研究に委ねたい。

## 8. ま と め

今回の発掘調査によって得た成果ははかり知れない。墳丘、石室、遺物のどれをとっても、一級の価値をもつことに異論はない。現在、善通寺市内には、小さいものも含めると400を越す古墳があるとされているが、数のすごさだけではない。宮ヶ尾古墳の線刻壁画や磨臼山古墳（遠藤塚）の船形刳抜石棺など、内容的にも注目されているものが多い。けれども、王墓山古墳は、これらに勝るとも劣らない実質を備えている古墳である。

以下、王墓山古墳の特徴と価値を簡単にまとめてみたい。

1. 地山整形をして2段築成による墳丘をなし、膨大な量の盛土をしている。石室は盛土中に構築。
2. 横穴式石室を埋葬主体にもつ前方後円墳である。石室は竪穴式石室の名残りをとどめる。横穴移行間もない時期のものと思われる。
3. 「石屋形」と呼ばれる県下では初の遺体安置施設を玄室に内设している。石障・屋形の本拠九州地方との関連を考えさせる。
4. 質量ともにたいへん豊かな副葬遺物が埋納されていた。とくに、金銅製の装身具と鉄地金銅張りの馬具がたくさん見られた。これは、県下では例を見ない。また、鉄製品や須恵器類など段違いのスケールを誇る。被葬者の権力のさまがしのばれると同時に流入経路の解明が今後の課題となる。
5. 本墳の築造時期は6世紀前半と思われる。
6. 追葬が考えられる。副葬須恵器には時期差があり、石室床面及び敷石にも追葬をにおわせる痕跡が顕著。また、乱雑な遺物の集積状態もそれを裏づける。
7. 本墳を考える場合、一地方小地域の範疇を越え、中央及び先進地域との文化交流の緊密さを指摘せざるを得ない。



第61図 王墓山古墳遠景

調査関係者（順不同、敬称略）

○ 善通寺市教育委員会

✓佐柳 正、✓飛田 和幸、✓杉峰 俊男、饗庭 健、  
✓高木 芳子、✓片山 美代子、✓遠山 義雄

○ 香川県教育委員会

松本 豊胤、伊沢 肇一、✓東原 輝明、✓森本 義臣

○ 測量、発掘、整理作業員

山口 アサノ、✓横田 重子、✓大平 国丸、✓樋口 澄枝、  
✓香川 桂子、✓大崎 知子、株木 彰、西岡 俊幸、  
近沢 好輝、佐藤 広美、徳永 多佳子、藤田 佳子

○ 協力者

（香川県教育委員会）

渡部 明夫、大山 真充、真鍋 昌宏、玉城 一枝、  
坂口 淳子、他



第62図 石室発掘作業風景

---

---

# 王墓山古墳調査概報

昭和58年3月31日発行

編集・発行 善通寺市教育委員会

善通寺市文京町二丁目1番1号

印刷所 サ力工印刷

---

---